日本語オノマトペの類義語と語彙的安定性に対する考察

金賢廷

【キーワード】：オノマトペ、類義語、語彙的安定性、類義語の生産方式、音節添加

I　はじめに

日本語と韓国語にはオノマトペが豊富だと言われるが、その半数以上[1]は基本語基（例：ごろ（ごろ））に「オノマトペ標識」[2]が添加された類義語[3]である。日韓両国語オノマトペの音韻形態や語感に対する研究の大部分はその豊富な類義語に捧げられてきたとも言える。また、両国語オノマトペの語彙数が観察者によって異なる理由も、生産性の高い両国語オノマトペの類義語をどの範囲までオノマトペとして認めるべきかという問題に関わっている。本稿の目的は、オノマトペの語形や語感それ自体に対する観察にあるのではなく、語形の変化による語感の区別化が日本語オノマトペにおいてどういう方式で展開されたかを韓国語を参照しつつ観察し、日本語オノマトペが持つ語彙的不安定性の原因を考えてみることにある。

II　類義語の発生

日韓両国語にはなぜオノマトペが発達したのかという問いに答えるために、両国語オノマトペに類義語が豊富な理由を考えて見よう。そもそも類義語というものが発生する過程については次のように考えられる。動物の鳴き声や人間の声、自然界の音・動作を表わす言葉がオノマトペとして定着するためには、まずその言語がもつ音韻体系によってそれが組み立てられる必要がある。しかし、この過程の中で該当言語がもつ表現上の限界のために、もともとの鳴き声やもともとの状態などのすべてを表すことはできない。ただし、できるだけもともとの声・もともとの状態を忠実に表現しようとする欲求をもつ話者は、該

当言語がもつ音韻上の限界を補足するために各種のオノマトペ標識を動員することになる。言い換えれば、日韓両国語に発達したオノマトペと類義語は話者の発声器官と使用言語の音韻体系がもつ模倣・描写能力の限界を補おうとする努力の産物だということである。例えば、「がぶ」という語基に対して「がぶがぶ」「がぶっ」「がぶり」「がぶりがぶり」という類義語が存立できるのは、それぞれのオノマトペ標識が語基に付き、「連続性」「瞬間性」「確実性」「確実性＋連続性」という意味を添加させたからである。ところで、反復形、促音形、撥音形、り添加形などのオノマトペ標識はどんな語基につけさせても語基の意味変化において同一の効果が期待できる。すなわち、オノマトペ標識は音・状態・動作に対する個別的な観察から付けられるものではなく、すでに決まっている規則によって施されるだけなのである。

日本語オノマトペの類義語研究は２つの方向性を持っている。意味論的研究と形態論的研究がそれである。意味論的研究はオノマトペの語尾変化に伴って発生する微妙な語感の差を対象としている。一方、数多い形態論的研究の中でも注目すべきものは田守育啓（1983 、1993）と那須昭夫（1995）の説である。音節の添加による類義語の発生とオノマトペの語彙的安定性の関係について、田守（1983）は興味深い意見を述べている。田守は、まず日本語のオノマトペを２つの部類に区分した。すなわち、助詞「と」を義務的に伴うオノマトペと助詞「と」を随意的に伴うオノマトペに区分した。そして、助詞「と」を義務的に伴うオノマトペは単独では使われることがなく、この助詞を伴うことによってはじめて副詞としての機能を果たすという事実を踏まえた。従って、田守は助詞「と」を義務的に伴うオノマトペは語彙的安定性が低いものと理解した。しかし、田守は日本語オノマトペが「と」を伴う伴わない理由と、どういう形態のオノマトペが「と」を伴うことになるのかについては説明していない。ただし、田守(1993)は促音・撥音の添加は形態論的には一般語彙とオノマトペから共通的に見られる音韻現象だが、そのオノマトペ標識としての固有な機能は意味論的には明確に区別されているとしている。

さて、那須(1995) は、先行研究者と異なり日本語オノマトペ標識の理解において、オノマトペの４音節形態と促音に対し新しい見解を示している。すなわち、彼は、日本語オノマトペの韻律形態に対する観察を通じて２つの新たな事実を見出している。１つは、日本語オノマトペの形態に付与された韻律条件として４拍韻律が要求されるということである。那須は韻律的要求による制約が語の形成を決定するシステムとして作用するという音韻形態論モデルを受け入れて、日本語の一般語彙では２拍の韻脚単位となって文中で機能

しているのに対して、オノマトペにおいては４拍単位が語を形成する際に意味をもつという。

実は、日本語のオノマトペに４拍形態が最も多いということは多くの研究者によってすでに確認されている事実であるが、４拍形態が多い理由については積極的に論じられることはなかった。つまり偶然の結果として理解されてきたように思われる。これに対して彼は、日本語オノマトペは適格な形態をもって語彙的安定性を獲得しているとし、その最小単位として４拍韻律を主張したのである。言い換えれば、４拍未満の日本語オノマトペは語彙的に不安定な状態にあるというのである。

那須の２つ目の新見は、日本語オノマトペには４拍韻律というその存立条件を充足させるために２拍・３拍形態オノマトペに促音が動員されることもあると述べていることである。３拍形態のオノマトペには「と」が添加された形でないと、それ自体では文中に登場しないということは、西尾（1988）と田守（1983）によってすでに指摘されているが、那須は「と」が添加される理由について「日本語オノマトペは存立条件として４拍形態を必要とする」としているのである。特に促音の添加に対しては、それまで促音が「瞬時性」「急に終わる」ことを表わすオノマトペ標識または意味要素と認識されていたのに対して、那須は「撥音・長音がそれぞれの意味特性をオノマトペに反映させることを目的として随意的に含まれる要素である一方で、促音はそのような意味特性に拘束されることなく、テンプレートの充足という韻律的要求を満足するために義務的に添加される要素として捉えることができるのである」[4] と述べている。

以上、日本語のオノマトペの派生方式と語彙的安定性との関係に対する主な論議を考察してみたが、今後もその理論は活発的に行われるように思われる。

Ⅲ　オノマトペ標識と語彙的安定性

Ⅱで見てきたように、一般に日本語オノマトペには４音節形態が主流を成している[5]。しかしそれにもかかわらず、４音節形態は日本語のオノマトペのための絶対的な存立条件ではない。現に日本語のオノマトペには２音節語や３音節語もあるわけである。では、日本語のオノマトペは、いつからそしてなぜ、２音節や３音節ではなく４音節形態を志向するようになったのだろうか。

日韓両国語オノマトペのほとんどは２音節の語基を持っている。また日本語オノマトペは４音節形態を志向する。この２点を付き合わせると次のように考えることができる。語基だけでは微妙な語感を充分表現することができないために新しいオノマトペを作るとしたら、その最も単純で安定した形態は反復形であろう。すなわち、すでに存在するオノマトペは反復によって新しいオノマトペを単純に生産することができるのである。２音節語が反復された結果が４音節語である。しかし、語基から派生された日本語オノマトペの中で４音節語が大半を占めている理由が反復にあるとは必ずしも言えない。日本語の擬音語を対象にして調べた結果の＜表１＞[6]によると、日本語オノマトペを生産する際に最も頻繁に用いられるオノマトペ標識は語基に新しい音節を添加させる方式であることがわかる。これらは語基に対して「ゆったりした感じ（ーり）」、「急に終わる感じ（促音）」「共鳴（撥音）」「長く続く音（長音）」など、語基や語基の反復だけでは伝えることができない微妙な意味を伝えようとした努力の産物である。

＜表１＞　日・韓両国擬音語における派生方式別の類義語数

パターン	日本語(%)	順位			韓国語(%)	順位		
1	12(3.4%)	10位	12(3.4%)	4位	155(45.1%)	1位	155(45.1%)	1位
2－1	32(9.1%)	5位	95(27.1%)	2位	82(23.8%)	2位	107(31.1%)	2位
2－2	36(10.3%)	3位			17(5%)	4位		
2－3	27(7.7%)	7位			8(2.3%)	7位		
3－1	39(11.2%)	2位	148(42.4%)	1位	5 パッチムの増減 11(3.2%)	6位	パッチムの増減 11(3.2%)	5位
3－2	29(8.3%)	6位						
3－3	22(6.3%)	9位			16(4.6%)	5位	16(4.6%)	4位
3－4	24(6.9%)	8位						
3－5	34(9.7%)	4位						
4	95(27.1%)	1位	95(27.1%)	2位	55(16%)	3位	55(16%)	3位
合計	350(100%)		350(100%)		344(100%)		344(100%)	

注). 1:母音の交替による類義語 ―― 1
2:子音の交替による類義語 ―― 2-1:清音 ― 半濁音または半濁音 ― 濁音
2-2:清音 ― 濁音
2-3:その他
3:音節の増減による類義語 ―― 3-1:促音の増減
3-2:撥音の増減
3-3:リの増減
3-4:長音の増減
3-5:その他
4:反復による類義語 ―― 4
5:パッチムの増減(韓国語) ―― 5

こうして、日本語オノマトペでは語基となる２音節語に微妙な意味を追加させるために選択されるオノマトペ標識が、結果的には該当オノマトペの音節数を増やすことになる。それだけでなく、もしその音節が１音節か３音節であると、語彙的に不安定をもたらすようになる。この事実を一般的な日本語オノマトペのあり方に照らし合わせてみると日本語のオノマトペは４音節化の過渡期にあると解釈される。すなわち、オノマトペ標識が用いられることによって日本語オノマトペの語彙性は不安定になる。要するに、日本語オノマトペは微妙な語感の表現に適合する新しい類義語（＝オノマトペ）を生産した結果、語彙的安定性を失うようになったと言えるのである。

他方、韓国語オノマトペの場合、最も頻度の高い派生方式は母音交代と子音交代である。＜表１＞を通じて、韓国語オノマトペのほとんどはこの２つの方式によって生産されたものであることがわかる。韓国語のオノマトペの場合、その大部分が２音節形態である理由はここにあると考えられる。すなわち、語基を成している２音節語に新たな音節が添加されることなく、子音または母音だけが交代されるために、派生が行われる前後において音節数には変化がないのである。

ここで、オノマトペの発達過程を歴史的に考察してみると、日本語オノマトペの類義語が語彙的安定性を獲得していくプロセスについては、もう少し緻密な論証が必要だということがわかる。朝山（1940)、稲場(1972)、鈴木(1974)によると、オノマトペの発達過程は大体次のようであると言える。

①上古には２音節のオノマトペに助詞「と」が付いた形態が文中でよく使われていた（稲場、1972）（鈴木、1974）。

②上古にはオノマトペの語尾につく助詞としては「に」が圧倒的だったが、中古には「と」　のみとなった（朝山、1940）。

③上古から反復形態のオノマトペには助詞「に」「と」が付かない傾向があった。その傾向は近世において強まった（稲場、1972）。

④中世以後、促音、撥音を含むオノマトペが登場した（鈴木、1974）。

⑤近世以降は従来の形にかかわらず、その時その時の感覚で作られるオノマトペが増えた（稲場、1972）。

以上の事実を組み合わせてみると、次のように考えることができる。

近世以降日本人はそれまでのオノマトペに満足できなくなり、新しい語彙を作るようになった。その過程で語基を活用した類義語が多数生産された。人々は段々語形に拘束されず自由に類義語を生産して行った。最も早い時期に採用されたオノマトペ標識は反復であった。さらに日本語には存在していなかった促音や撥音も中世以降オノマトペに使われるようになった。こうして、２音節を基本としていた日本語のオノマトペはその音節数を増やすようになった。しかも、「に」や「と」が後接することにより、促音などが加わって作られた新しいオノマトペも４音節語となって安定性を得ていた。すなわち、はなばなと発達していた反復による４音節類義語に、促音の入った４音節語もが加わった。こうして日本語のオノマトペは４音節形態が主流となっていたのであろう。

ここで注意したいのは、オノマトペの語尾に助詞「と」が付くのは、本来オノマトペを４音節形態にするためだとは言えないということである。なぜなら、そもそも「と」が使われ始まった頃には、オノマトペの語基の２音節に「と」がついて３音節を成すのがむしろ一般的な傾向だったからである。すなわち、日本語オノマトペの中で４音節形態が主流として定着する以前から、日本語オノマトペの語尾に助詞「と」や「に」が付くようになっていたということである。

Ⅳ おわりに

以上のように本稿は、日本語オノマトペがもつ語彙的不安定性の原因を、新しい音節添加という、類義語の生産（派生）方式に求めた。その一方で、日本におけるオノマトペの中で４音節形態が数的に支配的な地位を占めるようになった理由、またそれが日本語オノマトペの安定性を支えていることを考えてみた。その際には、Waida(1984)が定義したオノマトペ標識が実際に採用される頻度を、日韓両国語の擬音語を対象にして調べてみた。また、日本語オノマトペの発達過程については先行研究により発見された事実を整理してみた。その結果、日本語オノマトペに４音節形態が多い理由も、１次的には音節添加という類義語の生産（派生）方式から探ってみることなどを確認することができた。

注

[1] 例えば、阿刀田稔子・星野和子(1993)『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社の収録語総数 1700 語のなかの 962 語(56.6%)は類義語である。

[2] Waida(1984)は２音節形態では日本語オノマトペとして適格ではなく、「促音」「撥音」「り」の中のどれかを伴うと言い、反復を含めてこれらの派生手段をオノマトペ標識(Onomatopoeic Markers)と呼んでいる。

[3] 類義語の定義について国語学研究辞典は「同一言語内で語形が異なっていてもその指す意味がほぼ同じである２つ以上の語」としている。オノマトペにおける類義語について青山(1972 、34 頁)は「… 母音の陰陽の交替、子音（破裂音・破擦音の場合は平音、濃音、有気音）の交替によって微妙なニューアンスを与えることができる。これらは、後に意義が分化したものもあるけれども、大体において類義語と呼ぶことができよう」と述べている。

[4] 那須(1995)、16 頁。

[5] オノマトペとしての語彙的安定性を獲得するための最小条件として４音節が必然ではないことは、韓国語の擬音語に２音節語が最も多いことからも明らかである。

[6] 語彙の選別に当たっては、浅野鶴子(1988)『擬音語・擬態語辞典』角川書店および青山秀夫(1991)『朝鮮語象徴語辞典』大学書林を用いた。

参考文献

青山秀夫(1972)「現代朝鮮語の擬声語」『朝鮮学報』65

朝山信弥(1940)「語尾に「に」を有する古代象徴語の一問題」『国語国文』10-2

浅野鶴子(1988)『擬音語・擬態語辞典』角川書店

阿刀田稔子・星野和子(1993)『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社

稲場真珠(1972)「擬音語・擬態語に於ける母音構造と派生語との関係について」『成蹊国文』5

金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』東京堂出版

窪薗晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版

鈴木雅子(1974)「６擬声語・擬音語・擬態語」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法

４』明治書院

田守育啓(1983)「オノマトペ―音韻形態と語彙性」『人文論集』19(2)、神戸商科大学経済研究所

田守育啓(1993)「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」『言語』22(6)大修館書院

那須昭夫(1995)「オノマトペの形態に要求される韻律条件」『音声学会会報』第 209 号

西尾寅弥(1988)『現代語彙の研究』明治書院

山口仲美(1973)「続中古象徴詞の語音構造―撥音・長音・促音に関する問題をふくむ語例を中心に―」『共立女大短大・紀要』16

Waida,Toshiko(1984) "English and Japanese Onomatopoetic Structure" *Studies in English* 36,Osaka Women's University,55－79.